広報市民リポーターだより ⑤

時代を語るゴミ

市民リポーター
石田 かずみ（御成町1丁目）

◀畠山課長からリポートする石田リポーター（左）

ゴミは文化のバロメーターと言った人がいますが、**私たち市民が出すゴミ**がどのように**処理**されているのか、そしてその知られていないゴミ**処理の過程**にはどんな**問題**があるのか。

だれもがかかわり、**避けては通れない**ゴミについて「ゴミはいま……」をテーマにリポートしてみました。

私たちが出すゴミはどうなるのだろう

取材はもちろんゴミ焼却場（正式名称は大館広域第一環境センター）で行いました。案内をしてくれたのは大館市環境衛生課長の畠山さんです。

さて、私たちが毎日出すゴミは、可燃物は週二回、不燃物は月二回、そして粗大ゴミや電池などの処理困難ゴミは年に二回、それぞれ集収されているわけですが、集収されたゴミの内訳を見ると、可燃ゴミの中には有毒ガスを発生するといわれているナイロンや発泡スチロールも含まれています。「なぜ？」と畠山さんに尋ねると、ウン、いい質問だねといった感じでセンターの設備概要を説明してくれました。「このセンターの焼却設備には有害ガス除去装置として、焼却炉に生石灰を投入し、熱と反応させて固型物として除去できるので御安心を」とのことで、その後メカの話になりましたがメカに弱い私にはチョットといったところでした。有毒ガスは大丈夫なのかと疑問に思っている人は結構多いらしく、よく問い合わせがくるそうです。

次に「どうなっているのパートII」という感じで電池の問題について聞いてみました。電池は年二回、処理困難ゴミとして体温計や蛍光管などといっしょに集められるわけですが、これらには水銀という本当に手がつけられない物が含まれています。今現在このセンターでは約二〇トンの使用済乾電池を抱えています。国の処理方針では、ゴミと一緒に処理しても人体に影響をもたらすほどの危険はないというのですが……」と畠山さん。この問題は本当に頭の痛いことでしょう。今、センターではもっとも安全な処理方法を目指して検討を重ねているそうです。

一日のゴミの量は？

ところで、私たちは一日にどれくらいゴミを出すのでしょう。なんでこんなにゴミが、と不思議に思うほど多量に出るこのゴミあのゴミ。これはやはり商品のパッケージとかも大きな要因ですね。商品全体の二〇％～三〇％はパッケージ、ゴミになる部分です。これを少なくするには消費者と生産者双方の意識革命が必要なんですけれど、以前に比べたらだいぶパッケージがシンプルになった商品も出回っているとはいってもまだまだなのです。スーパーで買い物をして家に帰り、商品をパッケージから出して比べたところ、パッケージの山の方が大きかった。ゴミを買って帰った気分になってしまいます。

私たち市民が一日に出すゴミの量は、一人当たり約七〇〇グラムとのこと。これを四人家族で一年間とすると、なんと約一〇二二。グラム、一トンではないですか。ふだん何げなく捨てているゴミが、これほどの数字になるとは驚きでした。

リサイクルは大変だ

年に二度の粗大ゴミの集収日。一時預かり所に山と積まれます。ふだん待ってましたとばかりに、一時預かり所に山と積まれます。ふだんでも大変な集収作業なのに、粗大ゴミの集収には本当に頭が下がります。私なんかはそれを横目で見ながら、「あれはまだ新品同様じゃないか」などとうろたえてしまうのです。こういう物を集めて年一回でもリサイクルショーを開いたらと思ってしまうのですが、畠山さんによると過去にもそんな話は何度かありましたが、大館の状況を考えると個人の購買力の低下につながるとともに採算がとれないなど多くの問題があるのだそうです。私などは今ブームであるレトロ（懐古）趣味があるので、そんな点から始めてもと思ったりするのですが。結構古き良き時代の物が惜しげもなく捨てられてますよね。畠山さんも物を大切にする心を育ててほしいと話していました。

なんとすごいゴミだ

畠山さんからお話を伺った後、今日のメインであるゴミ焼却場を案内してもらいました。私は初めて見ましたが、ゴミ集収車が各町内から集めて来たゴミの多さに思わず「おっ、こいつはすごい」とビックリしてしまいました。そして私の脳裏をかすめたのは、いつの時代にか、すべてはこのゴミに埋もれてしまうのでは、またすべての物はゴミになりうるのだなということです。何かむなしくなってしまうのでした。

これだけは言っておきたい

取材を終えて帰ろうと立ちかけたら、ちょっと待ってくれと言わんばかりに畠山さんが言いました。「センターには環境衛生のプロが集まっているのです。今やゴミを昔の意識で考えることは大変な誤りだといえます。ゴミの問題は都市機能をも左右してしまうのですから。それゆえこのように立派な施設を設置し、専門的な知識を身につけた技術者、集収作業員、その他多くの人々がこの仕事に携わっているのです」と。

街がうまく機能しているのは、こうした人たちの影の力があるからなのです。感謝して、今一度自分の目の前にあるゴミのことを考えたいと思います。

▲ゴミ焼却場の説明を案内される石田リポーター

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。